様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２６１９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０７０５

研究課題名（和文）異なる学術分野の英語論文で使用される第一人称代名詞の特徴と英語教員の認識

研究課題名（英文）The Use of First-person Pronouns in Research Papers in Different Fields of Study and the Perception of First-person Pronoun Use by English Teachers

研究代表者
川口　恵子（Kawaguchi, Keiko）

芝浦工業大学・工学部・教授

研究者番号：８０３６９３７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：著者を指す第１人称代名詞（Iやwe等）が英語教育・工学という２つの異なる分野でどのように使用されているかを出版年代の観点も含め学術誌論文を分析した。各分野の主要学術誌２誌ずつより選んだ約250編が分析対象である。その結果、第1人称代名詞は工学系論文で最もよく使われており、英語教育分野では、日本人研究者の第１人称代名詞の使用頻度は英語母語話者研究者に比べ低いことがわかった。また、工学系論文では20年前と最近の論文での代名詞の使用頻度に差がなかったが、英語教育系論文では年代による差が見られた。大学英語教員に実施したアンケートより、第1人称代名詞の使用は様々な考えに基づいていることがわかった。

研究成果の概要（英文）：We analyzed first-person pronouns used to refer to the author(s) in English research papers from two different fields of study, engineering and TESOL. About two hundred fifty research articles were chosen from two acclaimed journals in each field to analyze the use of first-person pronouns with a perspective of publication years. We found that first-person pronouns were used most frequently in the engineering field and that the frequencies of first-person usage by Japanese TESOL researchers were much lower than those of native counterparts. In the engineering field, there were no differences observed in the first-person pronoun usage between two periods of time, in recent years and 20 years ago, but in the TESOL field, the publication years somewhat influenced the use of first-person pronouns. The results of questionnaires conducted on college English teachers revealed that the process of deciding whether to use first-person pronouns is a complicated process involving various factors.

研究分野：外国語教育

キーワード：第１人称代名詞　研究論文　テキスト分析　コーパス　頻度分析　ディスコース機能　著者の声　アカデミックライティング

１．研究開始当初の背景

英語のアカデミックライティングや学術論文の書き方の基礎を教えるのは多くの場合文系出身の英語教員のことが多い。一方、指導する学生は異なる分野を専攻する学生の場合も多い。そこで、英語教員は異なる学術分野で慣習的に実践されている言語の使い方について認識していることが必要だ。このような慣習的な言語の使い方の１つが「著者」を指す第１人称代名詞の使用である。実際、実験やシミュレーションの結果などを報告することの多い工学系の学術論文で著者を指す we, our, us が意外と多用されている印象を持つことがある。

そこで、学術論文で用いられる「著書」を指す第１人称代名詞が、英語教育関連分野の学術誌と工学系分野の学術誌でどのように使われているのか、さらに、英語教育分野においては、日本人および英語母語話者研究者の間で使用が異なるのかを明らかにすることにした。

２．研究の目的

論文中で用いられる「著者」を指す第１人称代名詞はどの箇所で、どの程度使ってよいのかについては明確なルールがない。さらに、英語の研究論文の書き方やアカデミックライティングの教科書では「客観性を重視し、第１人称代名詞の使用は控えめに」とあったり、「研究の重要性や研究者の責任、貢献を示すため第１人称代名詞は積極的に使ってよい」とあったりで、様々であり、実際は何が標準的なのかを判断するのが難しい。

この研究では、英語母語話者の研究者の代名詞の使用と比較し、日本人の英語教育関連の研究者が、論文で著者を指す第１人称代名詞をどのように使用しているかその特徴を明らかにし、さらに、時代によって第１人称代名詞の頻度は異なるのか、また、工学系の分野と使い方が異なるのかを調査することを目的とした。

３．研究の方法

（１）英語教育関連の日本人研究者の論文中の第１人称代名詞の使用実態を調査するため、国内の主要な学術誌、JACET Journal（以後 JJ と表記）より、2009 年～2011 年、1999 年～2001 年、1899 年～1991 年の各年号より無作為に論文を７本ずつ選び、３つの年代（現在、10 年前、20 年前）を代表する各 21 編、計 63 編でコーパスを構築した。その後、コンコーダンスソフトウェア *AntConc* を使用し、第１人称代名詞（I, my, me, we, our, us）を抽出した。I などの単数代名詞は、引用の場合を除外、we などの複数代名詞は、一般の人や、著者と読者を含めて指す場合を除外し、著者のみを指す代名詞が論文のどの箇所で使用されているかを調べ、頻度を数えた。また、それぞれの代名詞がどのようなコミュニケーションの目的で使用されているか、ディスコースの機能を代名詞が使われている文脈より判断し、14 のカテゴリーに分類した。

（２）同じ分野（英語教育関連）の英語母語話者研究者の論文中での著者を指す第１人称代名詞の使用を調査するため、国際学術誌 TESOL Quarterly（以後 TQ と表示）より上記（１）と同様の方法で論文を選び、コーパスを作成、同様の方法で頻度、ディスコースの機能を調べた。

（３）工学系学術誌での著者を指す第１人称代名詞の特徴を調べるため、同様の方法で国際学術誌 Journal of Applied Physics（以後 AP と表記）、IEEE Transactions on Robotics and Automation（以後 TR と表記）の 2 誌を調査した。

（４）日本人の研究者がどのような認識をもって著者を指す第１人称代名詞を論文中で使用しているかを探るため、代名詞の頻度や、論文観、さらに、アカデミックライティングの指導方法についての質問を作成、日本の大学で英語を教える大学教員に対してアンケート調査を行った。

４．研究成果

（１）英語教育関連研究論文中の著者を指す第１人称代名詞の使用（日本人研究者と英語母語話者研究者の比較）について以下の結果を得た。

①著者を指す第１人称代名詞の使用頻度は総じて日本人研究者の方が低く、特に、I の使用頻度が非常に低かった。

例えば、直近の年代（2009 年～2011 年）での 2 誌の比較では、1,000 語毎の著者を指す第１人称代名詞の頻度に約 8 倍の開きがあった。（表１）

②双方の学術誌において、I より we の使用頻度の方が高く、単著より共著の場合の方が「著者としての声(author’s voice)」を本文に介在させることに抵抗感がないことが示唆された。（表１）

表１　英語教育学術誌（2009～2011 年）の著者を指す第１人称代名詞の頻度（1,000 語毎）

| | I | my | me | we | our | us | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| JJ | 0.08<br>13% | 0.00<br>0% | 0.02<br>3% | 0.45<br>74% | 0.00<br>0% | 0.06<br>10% | 0.61<br>100% |
| TQ | 1.48<br>30% | 0.47<br>10% | 0.11<br>2% | 1.88<br>38% | 0.84<br>17% | 0.12<br>3% | 4.90<br>100% |

③著書を指す第１人称代名詞は、双方の学術誌においてアブストラクトも含め論文の全般に渡り使用されており、著者の存在が論文

全般に渡り示されていた。（表２）

表２英語教育学術誌論文中（2009～2011 年）の著者を指す第１人称代名詞の分布

| | 抄録 | 序 | 方法 | 結果 | 考察 | 結論 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| JJ | 3% | 22% | 20% | 26% | 22% | 7% | 100% |
| TQ | 4% | 19% | 29% | 5% | 34% | 9% | 100% |

④論文の出版年代別で著者を指す第１人称代名詞の頻度を検証した結果、直近の論文では英語母語話者の研究者(TQ)の代名詞の頻度は増加していたが、日本人研究者(JJ)の代名詞の頻度は減少していた。

例えば、1,000 語毎の著者を指す第１人称代名詞の使用頻度は、JJ では、直近の論文では 20 年前の４分の１以下に減少、TQ では、2 倍弱に増加していた。（表３）

表３ 異なる年代の英語教育学術誌の著者を指す第１人称代名詞の頻度（1,000 語毎）

| | I, my, me | we, our, us | 計 |
|---|---|---|---|
| JJ (1989-1991) | 0.49 | 2.05 | 2.54 |
| JJ (2009-2011) | 0.10 | 0.50 | 0.61 |
| TQ (1999-2001) | 1.32 | 1.46 | 2.78 |
| TQ (2009-2011) | 2.06 | 2.84 | 4.90 |

⑤研究者の国籍の他に質的あるいは量的研究という異なる研究手法が論文中の著者を指す第１人称の使用に大きく影響を与えていることが示唆された。そこで、JJ、TQ のコーパス中の論文の一部を入れ替え、研究手法・著者数と代名詞の頻度との関係を検証した。その結果、質的研究論文の方が代名詞の使用が多くなる傾向があることが確認された。

（２）工学系学術誌中の著者を示す第１人称代名詞の使用について以下の結果を得た。

①著者を指す第 1 人称代名詞の使用頻度（1,000 語毎）は工学系学術誌２誌（AP, TR）ともに、英語教育学関連の論文より高かった。また、2 誌ともに、時代による頻度差も見られず、英語教育学関連の学術誌と異なる実態が明らかになった。(表４)

表４ 工学系学術誌で使用された著者を指す第１人称代名詞の頻度（1,000 語毎）

| | I, my, me | we, our, us | 計 |
|---|---|---|---|
| AP (1989-1991) | 0 | 5.28 | 5.28 |
| AP (2009-2011) | 0 | 5.72 | 5.72 |

③工学系学術誌および英語教育学系学術誌で使用された著者を指す第１人称代名詞の機能は「研究方法や研究デザインを説明する」「結果を報告する」、「結論を述べる」など研究内容に関わるものが中心であった。「研究に対しての責任や学術分野への寄与、希望や期待を述べたりする」ために使われた第１人称代名詞は、割合は低いが TQ で観察された。

（３）大学で英語教育に携わる教員 70 名に対して行った「論文中の著者を示す第１人代名詞の使用実態とその認識」についてのアンケート調査より得られた回答は、直近の JJ で見られた第１人称代名詞の使い方を反映するものであった。

さらに、第１人代名詞の使用にどのような論文観や考えが関係しているのかについては、論文中の第１人称代名詞の使用に関して、「学術論文は客観的に書くべきである」という論文観だけでなく、「自分の好みはあるが、投稿する学術誌の代表的な書き方に合わせている」というディスコースコミュニティーへの配慮、「時代や専門分野により著者を示す第１人称の使用頻度に変化は意識したことがあるが、自分が指導を受けた時に身につけたスタイルを変えることは難しい」という指導時の経験といった要因も働いていることがわかった。

以上の研究結果は、学生に英語論文やアカデミックライティングの書き方を指導する際、また自らの論文を英語で書く際の有益な参考情報となるであろう。さらに、漠然と自分なりの判断で使用していた著者を示す第 1 人称代名詞の著者の声としての意味を再考するきっかけとなるであろう。

今後、著者を示す第１人称の使い方の研究を続けていく上で検討が必要なのは、学術誌やそのディスコースコミュニティーの特徴を捉えるためにどのように論文を選びコーパスを構築するかという点にある。当初の方針で無作為に論文を選んだが、研究手法の違いや著者の人数が第１人称代名詞の使用に少なからず影響を与えるがわかった。さらに、工学系の研究は単独で行われることが殆どない。このように、各分野の研究内容の特性も考慮にいれる必要があるであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①川口恵子、伊東田恵、太田理津子、非母語話者の英語教育研究論文における第 1 人称代名詞の使用と認識について、査読有、29 巻、2015、pp.57-70

②Keiko Kawaguchi, Ritsuko Ohta, & Tae Ito, The Changing Trends in the Use of First-person Pronouns in TESOL Research Articles, 査読なし, The Proceedings of 2013 ALAK International Conference, pp. 89-95

〔学会発表〕（計３編）

①Keiko Kawaguchi, Ritsuko Ohta, Tae Ito. Writer visibility in research writing. To be presented at JALT 2015, November 20-23, Hamamatsu, Shizuoka

②Keiko Kawaguchi, Ritsuko Ohta, Tae Ito, Differences of first-person pronoun use between TESOL and Engineering research papers, AILA 2014, August 12, 2014, Brisbane, Australia

③Keiko Kawaguchi, How much can a writer use we / I in research papers, JALT 2012, October 13, Hamamatsu, Shizuoka

６．研究組織

(1)研究代表者

川口　恵子　(KAWAGUCHI, Keiko)

芝浦工業大学・工学部・教授

研究者番号：８０３６９３７１

(2)研究分担者

伊東　田恵　(ITO, Tae)

豊田工業大学：工学部・准教授

研究者番号：４０３１９３７２

(3)連携研究者

太田　理津子 (OHTA, Ritsuko)

慶応義塾大学・環境情報学部・講師

研究者番号：５０５３７４１２